

会議結果報告書

令和4年7月11日

会議の名称	第1回舞鶴市第5期地域福祉計画策定懇話会	
種別	<input type="checkbox"/> 附属機関 <input checked="" type="checkbox"/> 懇話会等	
開催日時	令和4年7月11日(月) 13時55分～	
開催場所	京都府中丹広域振興局舞鶴総合庁舎3階 第1会議室	
出席者	川島委員、田中委員、西邑委員、加藤委員、山内委員、今安委員、佐藤委員、桑原委員、町田委員	
議題	<p>●報告事項</p> <p>(1) 地域福祉計画について</p> <p>(2) 第5期舞鶴市地域福祉計画策定について(策定方針、策定スケジュール等)</p> <p>(3) 舞鶴市の地域福祉の状況について</p> <p>●協議事項</p> <p>(1) 地域福祉の推進について(川島委員より)</p> <p>(2) 地域福祉の各専門分野からの現状認識と課題(各委員より)</p> <p>(3) その他 アンケートについて</p>	
公開の区分	<input checked="" type="checkbox"/> 公開	
	<input type="checkbox"/> 部分公開	[理由]
傍聴者数	0名	
審議結果及び主な意見等	別添会議録のとおり	
会議録の作成様式	<input type="checkbox"/> 詳細 <input checked="" type="checkbox"/> 要約	
備考		
担当課	舞鶴市福祉部福祉企画課 TEL 0773-66-1011	

第一回 舞鶴市第5期地域福祉計画策定懇話会

日時：令和4年7月11日(月)午後1時55分～

場所：京都府舞鶴総合庁舎3階 第1会議室

委員： 福知山公立大教授	川島典子氏
舞鶴自治連・区長連協議会 副会長	田中幸男氏
京都府中丹東保健所 福祉課長	西邑章氏
舞鶴市民生児童委員連盟 副会長	加藤喜美子氏
舞鶴市社会福祉協議会 地域福祉課長	山内亨氏
地域生活支援センターみずなぎ センター長	今安えり子氏
城北地域包括支援センター 管理者	佐藤葉子氏
舞鶴学園 施設長	桑原位修氏
NPO 法人ニュートラル支援員	町田弘樹氏
事務局：舞鶴市福祉部 部長	杉本和浩
福祉企画課 課長	松本諭一
係長	川手大輔
係長	玉川佳美
主事	三野槇子
業務支援職員	桐藤美穂子

1. 開会

委員が集まったため、定刻よりも早めに開会。以後、松本課長により議事の進行。

2. 挨拶

杉本部長

3. 委員及び事務局紹介

委員、事務局が順番に自己紹介を行う。

4. 会長、副会長選出

会長および副会長の選出にあたり、会長を川島委員、副会長を山内委員とする事務局案を挙げたところ、異議がなかったため、事務局案通りとした。

5. 報告事項：福祉企画課・川手係長より説明

- ① 地域福祉計画について
- ② 第5期舞鶴市地域福祉計画策定について(策定方針、策定スケジュール等)
- ③ 舞鶴市の地域福祉の状況について

6. 協議事項

以後、議事を川島委員に交代

(1) 地域福祉の推進について(川島委員より)

近年の地域福祉政策、計画を策定するうえでのポイント等について川島会長から説明。

(2) 地域福祉の各専門分野からの現状認識と課題(各委員より)

【主な意見】

■ 田中氏

・舞鶴市は移住定住に力を入れており、移住者の方が増えてきていると感じている。程よい距離感の付き合いができていますが、移住者どうしのコミュニティがあるかどうかは分からない。舞鶴に足りない点について、よその視点を持った人から意見をもらうことができれば、市のためになるのではないかと。

→川島: 貴重な意見である。計画の策定においては、専門家の意見だけでなく、地域の隅々から、地域で必要なことが何なのかを吸い上げる必要がある。計画の策定にあたり、自治会へのアンケートを実施するため、自治会長にご活躍をいただけるよう、協力を依頼してほしい。

■ 西邑氏

・日本人は、障害者と地域で暮らしてきた経験が少ないと言われている。障害者にどう接したらいいかが分からず、精神障害者については特に理解がないとされる。最近になってようやく、精神障害者を含めたケアシステムを構築する、という考え方が浸透してきており、さらには、精神障害があるなしに関わらず地域に住めるように、というニュアンスになってきている。なので、計画のなかに、メンタルヘルスの項目をぜひ入れてもらいたい。近年はうつ病患者も増えているため、みんなが心も体も元気でいられるようにするというのが大切になる。

→川島: コロナ禍で自殺者が増加しており、中でも女性の割合が大きいと言われている。地域のつながりが強い地域は自殺者が少ないと言われているため、地域ぐるみで自殺を防止することが大切である。舞鶴市は、次回の懇話会までにメンタルヘルスに関する資料を用意してほしい。

■ 加藤氏

・バスの本数が少なく、路線も限られているため、交通手段がなく困っているというお年寄りの声をよく聞く。免許を返納すると病院へ行くのも大変で、高いお金を払ってタクシーに乗ったり、家族に頼んで連れていってもらったりしている。移動スーパーや宅配サービスのように、地域で生活に困らない仕組みを作ってもらいたい。

・認知症になりたくない、という気持ちを持っている人が多く、体操教室を開いたりして、予防するための取り組みに力を入れている。一方、認知症になったあとの対応については、どうケアするかの話し合いが進んでいないと感じる。

→川島:非常に貴重な意見である。認知症の予防に加え、なったらどうケアするかが大切。移動の手段がないということについても、重要な課題である。第四次地域福祉計画を見ると、そこが欠けているような感じがしたので、今回は盛り込む必要があると思う。

■町田氏

・引きこもりへの支援を行っている中で感じるのは、引きこもり状態になった人の多くは実家に戻るが、その際、家庭のなかに生活困窮などの別の問題がある場合、悪化してしまうということである。家庭内の他の問題も解決しないと、引きこもりは解決しない。

・引きこもりはざっくり言うと、極度の自己否定感だ。「自分は生まれてくるべきでなかった」「自分は社会の不適合だ」という状態が長く続くと、他者への恐怖感が高まり、社会との距離感が大きくなる。引きこもりの人と関わるうえでの難しさは「地雷が多い」ということ。ちょっとした声の掛け方の違いで、深刻な事態になることもあり、神経を使って付き合っている。地域の方に引きこもりとつながってほしいと思うが、ボランティアの人に、こんなストレスを抱えること、神経を使わせることをやってもらっていいのだろうか、とってしまう。例えば子供食堂なら、作ったごはんでは子供の笑顔が見られる、というメリットがある。でも引きこもりの場合は、ボランティアの方がメリットを感じづらいかもしれない。引きこもりに対する地域の理解を得たいが、団体としても、個人情報をなかなか出せないという難しさはある。

・交通の足の話でいうと、引きこもりの居場所へいこうにも、舞鶴では車がないと行きづらい。保護者がいれば送迎できるかもしれないが、ほとんど共働きなので難しい。

→川島 引きこもりは数が多く、支援が大切だ。舞鶴にも、引きこもりの人が参加できる居場所を作り、当事者が社会に役立てていることを実感できるようにしたい。子供から高齢者までが関わる問題であり、重層的支援体制においては、全世代への引きこもり支援を盛り込みたい。

■桑原

・児童養護施設は、社会の世相を写す鏡であると考えている。石炭から石油へエネルギーが代わった頃は、仕事をなくした炭鉱労働者の子が増え、サラ金問題が話題になった頃は、夜逃げした親の子をよく受け入れた。今は多いのは虐待を受けているケースで、本学園で預かっている子供の9割以上が虐待を受けていた。核家族化が進んだ結果、子育てを分かっている人が親になり、周囲に相談ができずに孤立していることが原因のひとつではないかと考えている。

・子供を預かるときは、児童相談員から経過を聞いているが、虐待に至るまでのプロセスは多種多様で、子供に対しても、家庭に対しても、状況に応じた個別の支援が大切だと思っている。まなびあむなどのハード面で補える家庭もあれば、相談業務で補える家庭もある。それすらも自分で手を伸ばすことができない家庭には、我々が手を差し伸べて家庭に参加し、虐待に至る前になんとかしたい、というのが、入所する子供たちを見てきた自分の強い思いである。そのためには、日頃からつながりを持っておくことが大切で、本学園では相談業務を行っているが、相談がなくても、お茶を飲むだけでもいい、というようにしている。入所している子供の母子手帳を見てみると、妊婦のときからずっと詳細に記録を取っていたのに、2歳になってから急に何も書かなくなった、というようなことがある。転んでしまったときに助けてもらえるように、日頃から社会のいろんなところとつながっておくことが大切ではないかと考えている。

・今、45人定員で35人が入所しているが、京都北部に限らず、様々な地域の子供を受け入れており、保護者と話すなかで、自治体によって得手不得手があると感じている。最近では、舞鶴市ではめずらしい小学4年生以上の学童保育を行っていて、受け皿を広げられるよう努力している。今の利用者だけでなく、児童養護施設から巣立っていった子供や、過去に利用していた保護者たちにとって、止まり木になるような「社会資源」でありたい、という思いがある。

・職員が働きやすい環境を整える大切さも感じている。切れ目のない福祉を提供するためには、職員にできるだけ長く働いてもらいたい、という気持ちはあるが、泊まり勤務があるため、結婚すると辞めてしまう人もいる。日中に職場で子供を預けられるようにし、職場の福利厚生も整えて、職員が福祉の場で働きながら、家庭も大切にできるようにしたい。

→川島 入所している子の9割以上が虐待と聞き、それだけ虐待が増えているのだ、と実感した。子供を虐待している人の8割は実の母親と言われている。それは、核家族化が進み、相談できる相手がおらず悩みを抱えてしまうからだ。だからこそ、地域の助けや、専門職の助けが必要である。舞鶴学園のように、福祉施設を地域に開かれた場とすることが大切である。施設は大切な社会資源であり、そこを拠点に、地域の人が集まってくる仕組みづくりが大切だ。福知山市の合計特殊出生率は2を超えており、京都府内でトップだが、その理由は、保育園が多く、社会資源が充実しているからだ。今ある社会資源を利用して、どう児童福祉を推進していくかを考えるのが重要になる。

■佐藤

・最近多いのは、ごみ屋敷になっている高齢者や、認知症の人である。そういう人に限って身寄りを探すことができず、郵便物で調べることになるが、ごみ屋敷をまず片

付かなければいけない。ごみを処分する費用は本人から出してもらわなければいけないが、通帳のありかが分からず、進められないこともある。何部屋かがごみで埋まっているケースは1、2ヶ月に1件、家全体がゴミ屋敷化しているケースは1年に数件くらいある。地域の 方はそれを遠巻きに見ている、「最近姿を見ない」と連絡が入ってくるケースが多い。地域での見守りの役割について、民生委員などでどう分担していくかを話し合う必要がある。

- ・地域の移動サービスについては、山間部だけでなく、街中にも欲しい。近くのスーパーへいこうにも、本人は誰にも頼めず困っている。医療の問題もあり、市内に大きな病院はいくつかあるが、病名によっては、市外に通院しなければいけないケースもある。医療や介護が届かない地域については、包括支援センターで「お出かけ保健室」というサービスに取り組んでいて、医療と福祉の職員が公民館に行き、地域で相談に応じている。このように、できるだけ「出かける包括支援センター」でありたいと考えている。

- ・コロナの影響で、昔は道端でみんなおしゃべりをしていたのに、そういう姿を見かけなくなったことが心配である。体力のない高齢者が外へ出なくなったので、状況を拾いづらくなってしまった。

→川島 地域で複合的に起こっている問題について、よく分かった。お出かけ保健室は、大変興味深い取り組みであり、舞鶴の顔になりそうである。

■今安

- ・第4期の地域福祉計画に掲載されている「地域の具体的な取り組み(p43)」で、障害者に関するアンケート回答がなく、やはり地域と障害のある人とのつながりは薄いのだ、と感じた。障害のある人が地域で生活するのは並大抵のことではなく、私たちが架け橋にならないと、一人で生活していけない。生活を支援していくなかで、地域の人に障害のある人についてどう理解を促すかが課題で、民生委員の方に障害について話をすることはあるが、身体障害は理解しやすくても、知的、発達、精神となると特に難しい。そこをどう伝えられるかが、私たちが一番頑張らなければいけないところだと思っている。地域での理解が生まれれば、地域で、あの人最近どうしたんだろう、という気づきが生まれ、適切な支援に早急につなげることができる。

- ・福祉の分野のなかでも、障害は、生まれてから死ぬまでずっと付き合っていかなければいけないのが大変だ。そのなかで、健康上の問題があるとか、家計の状況が変わったとか、成年後見が必要になったとか、そういった変化が出てきたときに、次の機関につなげるのが私たちの大切な役割であり、連携が取れるような体制を作っておきたい。

- ・福祉の現場は、人材の問題も抱えている。私たちは何でも屋として動いていて、相談支援員は3人だが、365日24時間体制を取れるよう、自宅でも交代で携帯を持ち帰

って 対応している。こんなことをしたい、と思っても、その担い手がいないのが現実だ。

・コロナの対応にも頭を悩ませている。一人暮らしの人がコロナにかかった際は、保健所と私たちが連携して対応している。本当は地域の人に協力してもらいたいが、コロナだと そうはいかない。人材が限られているなかで、コロナ対応をどうすればいいかも検討がで きたらな、と思っている。

→川島 障害を持った方が住みやすい地域は、その他の人にとっても住みやすい地域。障害を抱えた人が暮らしやすい地域づくりを考える必要がある。

■山内

・社協では、子供、障害、高齢まで、多岐にわたって担わなければいけないが、中途半端なところもあって、かじりかじりでやっているのが現状。福祉送迎サービス事業を行っているが、運転協力者の高齢化が進んでおり、風前の灯だ。日常的な金銭管理などを手伝える事業(福祉サービス利用援護事業)では、98人と契約しており、認知症、精神障害、知的障害がそれぞれ3分の1ずつくらいいる。これは、法務省の管轄である成年後見制度とは違う厚労省管轄の事業であり、成年後見より緩い条件で契約することができる。98件は、府内で最多の件数である。そういう事業をやっているの で、市からは成年後見支援センターの委託を受けることになっている。他にも、貸し付けやヘルパーの事業、共同募金 委員会の事務局、災害ボランティアセンターの事務局など様々な業務に関わっている。

・課題のひとつは、担い手不足である。職員も、地域の担い手も、どちらも足りていない。送迎サービスの運転協力者も、ボランティアセンターの登録人数も減っている。ピーク時は、子育てがひと段落した人が担い手となっていたが、そういう人たちが80代になり、新しい人が入ってくれていない。分析ができていない訳ではないが、定年が65歳に引き上 がり、収入なしでは動きにくくなってしまったのだろう。

・さらには、現場にいと、どこにも支援機関を定められない人が増えてきているなと感 じる。障害者手帳がなく、高齢者でもないが、課題を抱えていて電話がかかってくるケ ースがある。社協で解決できないし、つなげる先もない、という人で、私たちに何もでき ないが、電話はかけてもいいですよ、つながっておきましょう、という人を何人も抱えて いる。何か起きたときに、対処できるよう、断らないことをモットーに対応している。

・計画に盛り込んでほしいのは、触法高齢者、触法障害者、に関する扱いだ。こういう人 はさらに地域から浮いてしまって、裁判の傍聴に職員が行くこともある。福祉企画課は再 犯防止の担当もしているの で、その知見も生かしてほしい。

→川島 社協が、まさに横串的な役割を担っていると感じた。人口減少で困るのは、地域のボランティアも高齢化してしまうところだ。専門職だけでなく、地域の担い手

も不足している。また、触法高齢者についても、司法の視点を持って考えなければいけない。

■松本 市では自殺対策の計画を策定しており、再犯防止推進計画もあるので、第5期地域福祉計画に盛り込むことができると考えている。移送サービスについては、高齢者支援課で、外出支援のチケットを半額くらいで販売する事業を行っている。また、ボランティアで送迎したい人と、使いたい人をマッチングするサービスもある。個々のサービスはあるが、面として浸透していないのが課題だと思っている。どの分野も根っこは同じで、担い手が減っているなかで、地域で肩を寄せられるようにしていかなければいけない、ということだ。高齢や障害といった枠を超えて支援を行う、そういう計画を作っていかなければいけないと思う。

(3)その他

・玉川係長より、民生児童委員および自治会長を対象とした、地域福祉に関するアンケートの実施について説明。質問項目について意見を募ったところ、西邑委員より、メンタルヘルスに関する項目を加えるよう要望があった。

7. 事務連絡

・松本より、次回の懇話会については、10月実施予定と説明。アンケート結果を報告する旨を伝えた。

8. 閉会 午後4時30分